



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES
Newsletter

第39号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>発行年月日：2015年3月20日
〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9
Phone 0561-62-4111 EX 2498
FAX 0561-63-9308
E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

Contents

- 第30回定例セミナー「国連やさまざまな国の中での女性」報告 1・2
- 学生感想文 3
- アジア保健研修所AHI 巡回報告会「バングラデシュ 未来を切りひらく 女性パワー」 学生感想文 4
- マシュマロの気恥ずかしさ 5
- ジェンダー雑感～来し方を振り返って思うこと～ 6
- 第8回「ジェンダー視点の卒業論文・卒業制作」報告会 7
- 第5期連続講座のお知らせ 8

2015年11月13日に第30回定例セミナー「国連やさまざまな国の中での女性」を星が丘キャンパスにおいて開催いたしました。以下はその概要です。

第30回 定例セミナー

国連やさまざまな国の中での女性

講師 有馬真喜子さん
(国連ウィメン日本協会理事長)



2014年11月13日木曜4限に、有馬真喜子さんを講師としてお招きし、第30回定例セミナーが星が丘キャンパスにて開催されました。セミナーのポスターには「ジャーナリスト、国連ウィメン日本協会理事長、法務省難民審査参与員」と講師の紹介がありましたが、おそらく余白が許せば延々とご活躍の肩書が続く方です。日本で女性の社会進出が非常に限られていた時代に、報道分野で女性はもっと稀であったろう頃に、有馬さんは朝日新聞社で11年、その後フジテレビでニュースキャスターを17年勤められた、バリバリの民間企業でのキャリアウーマンです。更に、仕事をこなしつつも、国や国連、各種団体の委員を勤めてこら

れました。このような経歴の有馬さんが、4つのテーマから構成されたレジュメに沿って、彼女の豊かな知識とご経歴ならではのエピソードを紹介されつつ、講演が進みました。

まず、マララ・ユスフザイさんのノーベル平和賞の受賞について言及されました。まだまだ世界には、女性だという理由だけで教育の機会が限られている人々がいること、マララさんもそうであったように命を危険にさらして通学している少女たちがいることを知ってほしい、と話されました。また、マララさん自身が今回の受賞2年前に、15歳で女性と教育に関するスピーチを国連で行っており、英語を母語としない者の



英語スピーチとしても非常に参考になると教えていただきました(授業準備の参考にせねばとメモを取る私)。

次に、女性の活躍推進に関して国内外の取組の歴史についてお話されました。国内でも近年、更なる女性の活躍について期待が高まっているけれど、その背景として、日本人女性の活躍の度合いが依然として低いことにあると。指標も様々あるけれど、世界有数の経済規模を誇る日本であるにもかかわらず、女性活躍のとある指標では世界で104位であり、改善の余地が大いにあること。また、世界的にみると、1975年に国際婦人年が設定され、各国の代表が集い、女性の地位向上についての施策や行動計画が話し合われたのが最初の世界的な取組であったこと。有馬さんはその当時、フジテレビにお勤めで、取材のため1か月開催地のメキシコに滞在されました。その後1980年デンマークのコペンハーゲン、1985年ケニアのナイロビと会議は続き、1995年に第4回目が北京で開催されました。この北京会議には、有馬さんは政府代表団の一員として参加されました。また、国連婦人の地位委員会のメンバーとして、この会議の準備にも3年にわたり関わってこられました。5万人が参加し世界最大といわれたこの会議で、361項目にわたる行動綱領が採択され、画期的な成果だったそうです。2015年には北京での採択から20年目として「北京+20」という記念会合や取組が世界各地で行われるというプレアドもありました。是非、今年のイベントにアンテナを張っておきたいものです。

続いて、国連で女性問題を扱うUN Womenという機関について説明されました。1945年の設立当初から国連が女性についての課題として扱ってきたのが、女性の参政権、婚姻の最低年齢の設定、国際結婚に伴

う子どもや女性の立場についてだったそうです。UN Womenは2011年に国連内の従来の女性関連4組織が統合し設立されました。貧困・差別・暴力のない生活を全ての女性に提供することを目標とし、そのための具体的なテーマと活動が紹介されました。ハリポッターシリーズに登場のハーマイオニー役のエマ・ワトソンさんがUN Womenの活動を支援する親善大使となり活動を行っていること、1990年代前半に大虐殺のあったルワンダで女性起業家が地元の産業である酪農を生かしてアイスクリームの製造販売をして経済的なエンパワメントを得ていることなどが紹介されました。字数の制約があるため、ここには全て記載しきれないほどの多様な取組事例を、講演では挙げておられました。聞いているこちらもう元気が出ました。

そして最後に、女性の地位向上について行動を起こすときにそれぞれの国の文化や伝統、習慣、宗教など如何に向き合うべきかという問題提起がなされました。すべての人々が自らの文化に誇りを持っている中、どう折り合いをつけるのか。相手の文化や習慣への敬意を保ちながらも、女性の地位をどのように向上させていくのか。これまで国連を中心に粘り強い努力がなされ、1つ1つの課題が乗り越えられてきました。今後もそのような粘り強く、継続的で丁寧な努力が必要であると講演を締めくくられました。

周囲と調整し、行動をとり続けてこられた有馬さんだからこそこの問題提起であり、ご提言であったと思います。思わず自分を振り返り、対人関係において、家庭、職場、地域にて、折り合いをつけるために粘り強く丁寧な努力を自分では行えているのだろうかかと振り返る良い機会となりました。

(文責 IGWS運営委員 福本明子)

学生感想文

土本 桜子

有馬さんのお話は、日本や世界における女性を中心とした人権の大切さを唱える内容だった。女性が教育を受ける権利を確立していくことは、女性の社会進出に密接に関わっているという。そして、女性のあり方は文化や伝統と関係しているが、それを変えることは難しいともいう。こうした言葉に共感した理由は二つある。一つは有馬さんが例に挙げられたマララ・ユスフザイさんのように伝統に縛られる女性たちがおかれた状況を想像できたこと、もう一つは日本の高齢者介護の性役割の変遷にも通じるように感じたからである。

今年、17歳で最年少ノーベル平和賞受賞者となったマララさんは、女性のための教育を受ける権利の重要性をメディアで訴え、その勇気を称えられることとなったが、一時はイスラム過激派の武装集団によって命を狙われる存在であった。マララさんの主張は世界中が知ることとなったが、「個人に意思や権利があること」が理解されない地域もあるため、一部のアフリカで行われている女子割礼のように、一生「心の傷」となるような慣習が残っている。割礼を行う女性たちは、昔から受け継いできたものを、地域のルールに従って遵守しなければならないという理由で続けている。

日本でも短時間では容易に変えられない文化があ

る。例えば性役割。ここでの文化は、日本の「近代教育」によって固定化されたものである。私は卒業論文で近世から現代までの高齢者介護の性役割について研究した。人々が長寿になった江戸時代に、健康であるための「養生論」と親に看病介護をつくす「養老論」が男性へ向けての「教え」として広まり、当主である男性が、家を継承する者として、親の介護責任も担っていた。明治時代に導入した「女子教育」では介護が女性の役割として教えられるようになる。近世では男性より劣っているとみなされていた女性は、男性に従属的な存在で、食事や裁縫などの家事労働を行っていたのだが、女子が良妻賢母を目指す教育では積極的に家政をとりおこなうよう促された。同時に介護役割も女性の責任領域となったのである。

日本では企業でも多様性に注目するようになったため、働く女性が増え、介護をする男性も増えている。だが、介護以外の分野でも、性役割は完全になくなったわけではない。人権を考えることは多様な人を理解することだ。私自身、文化や歴史に対する多角的な視点を持ち続けたい。

(本学交流文化学部交流文化学科4年)

小谷 一生

今回の講演会では、国連やさまざまな国の中で女性が活躍していることとそれを難しくしているものがあるということ学んだ。

「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」が今年、名古屋で開催され、私は「ESD あいち・なごや子ども会議」のボランティアとして参加した。子ども会議では、5つの分野に分かれてエクスカッションやグループ討議を行なった。「貧困」のテーマは、共通エクスカッション(国際理解、食料、貧困等)として全員が学習をした。世界の子どもたちの中には、学校よりも弟・妹の世話をしなければいけない女の子が多くいること。さらに住んでいる国や民族の慣習で10才までに結婚してしまう子どもがいるということ学んだ。そして今回の講演会でも、子ども会議で「貧困」のテーマで学んだことが「女性の問題」として紹介され、貧困と女性の問題はつながっていることを教えられたような気がした。

講演会で「世界の女性問題を考えるとき、女性の活躍をとて難しくしているものは、それぞれの国の文化や伝統、習慣、宗教など」と教えてもらった。ノーベル平和賞を受賞した17歳の少女マララ・ユスフザイさんは、女性の教育を否定するイスラム過激派に襲

撃されながらも、「1人の子ども、1人の先生、1冊の本、1本のペンが世界を変えることができます」と教育の重要性を訴えている。さらに、ボランティアとして参加した子ども会議からのメッセージでも、「世界の人々が協力して、どの国の人も教育が受けられる環境をつくってください」と大人のみなさんに向けて発信した。マララさんの受賞と子ども会議からのメッセージは、女性の活躍をとて難しくしているものどう向き合うかを考えるきっかけになったと感じる。

世界の女性の問題を解決していくこと、持続可能な開発のための教育をすることの2つは、それぞれが密接につながっているものだと気付いた。その国の文化や伝統、習慣、宗教と女性との関係を、どうやって改善していくのか。これらの関係に上手く向き合うことができるのか、できないのかでその国の未来が左右されるといっても過言ではないと、ESD子ども会議の学びを踏まえ、今回の講演会でより強く感じた。

(本学交流文化学部交流文化学科2年)

アジア保健研修所AHI 巡回報告会

「バングラデシュ 未来を切りひらく 女性パワー」
学生感想文

アジア保健研修所(AHI)巡回報告会に本研究所も受け入れ団体として参加しました。12月9日(火)にバングラデシュのソケール・バナさん(女性協同組合会長)とカジ・マゼッド・ナワズさん(NGOジャゴラニ・チャクラ財団職員)が報告に来てくださいました。参加した学生の感想文です。

馬場 桃子

この講演では、バングラデシュとそこで行われているNGOの活動、ジャゴラニ・チャクラ財団(NGO団体)の女性自立支援活動について学び、教育と自立の大切さを改めて感じた。

現在バングラデシュでは、貧困や児童労働、低年齢結婚など多くの社会問題があり、1日1ドル以下で生活する貧困層は全体の約43%にも上る。この財団は、貧困層の人々、特に社会的に立場の弱い女性を支援することで貧困問題の解決に向けて取り組んでいる。人々の経済的、社会的な発展のために、主に女性を



対象とした教育や研修、貧困者向けの経済的な支援等様々な活動を行っている。

講演者のソケールさんも自助グループ活動に参加し、現在7062名からなる協同組合の会長を務める。各自助グループは全て貧困層の女性達で構成、運営され、全員で貯金をしてグループ全体の資金を作り生計向上の支援を行う。つまり、女性達自身による相互扶助の支援である。また、自助グループからなる自助組織と全体を統轄する協同組合は、全体の支援、指導等を行い、研修も開催している。こうした活動は女性達の貧困問題の支援であると同時に女性達の自立を支援するものである。一般的にバングラデシュではイスラム教信仰があり、女性達は家庭内のみで過ごす。しかし、この活動によってその考え方は変化しつつあり、さらに研修や教育を受けることで女性達の知識やできることも増え、女性が自立し貧困から抜け出す糸口になっている。実際、ソケールさんも自身でもできることも収入も増え、自分自身の価値が高まったように思ったそうだ。

この相互扶助と教育は、今まで貧困のために学ぶ機会がなく賃金の低い仕事から抜け出せなかった人々がその連鎖から自身の力で抜け出し自立するために重要だと思った。また、教育での学びが自分の自信にも繋がり、女性達の自立を促し、貧困問題の解決や社会の発展に貢献するのではないかと考え、自立のための教育はこれからの社会に必要だと感じた。

(本学文学部英文学科4年)

マシュマロの気恥ずかしさ

後藤由紀恵

私は平成七年三月に愛知淑徳短期大学国文科を卒業しました。あまり真面目な学生ではありませんでしたが、一年生の後期に必修科目として履修した「創作」の授業はとても楽しいものでした。俳句・短歌・詩・小説・童話・シナリオなど、各自が興味のあるものを受けるこの授業は、国文科としては珍しいものだったのではないのでしょうか。私はクラス担任の授業だから、という安易な考えで短歌を選び、現学長である島田修三先生の授業を受けました。大きな階段教室の教卓から「居眠りは許すけど、私語をしたら僕への挑戦とみなすよ」とにこにこ笑いながら仰る先生の言葉に、それまでざわざわとしていた教室が一瞬にして静かになったことを覚えています。

授業ではさまざまな現代短歌が紹介され、時には課題で自分でも作るようになり、私は徐々にその世界に夢中になっていきました。十八歳だった私が特に惹かれたのが、村木道彦さんという歌人の二十歳前後の短歌でした。(本当は縦表記が良いので、どうぞ心の中で縦にして読んでみてください。)

死にてよき土地を想えばふかぶかと雪を積みたる貨車駅に着く
村木道彦『天昏』

ろうろうと天にとどろく風に告ぐ「ひとはさむさのなかに生れき」

逆説にわれは溺れて図書館の空あおあおと照りわたるかな

天涯はみどりの孤独ここはどここ レインコートのえりたてるかな

ふかづめの手をポケットにづんといれ みづのしたたるやうなゆふぐれ

するだろう ぼくをすてたるものがたりマシュマロ
くちにほおぼりながら

高校までの授業で教わった与謝野晶子や斎藤茂吉の短歌とは全然違う、私が持て余し気味だった自分への苛立ちや焦燥感を私と同じ言葉を使って二十歳前後の若者が詠んでいたことに、短歌ってこんな風に自分を表現することが出来るのだと強く衝撃を受けました。今から振り返ると、自意識過剰な若者の甘さが滲んで

いることも感じますが、それでも自分の原点として大切な世界です。と、手放して好きは好きなのですが、最後のマシュマロの一首への当時の印象は少し違います。「ぼく」と別れた女の子がマシュマロを食べながら自分を捨てた話を友達にでもしているのだろう、という失恋の歌に、平たく言えばとてもびっくりしました。確か「ぼく」にとって恋愛とはマシュマロほどの軽さでしかなかったのだという解説を聞いたような気がしますが、当時の私は恋愛なんでもっと大人になってからすることで、自分と同じような年齢の男性が「マシュマロ」などと甘い小道具を使って失恋を詠むことが無性に気恥ずかしく、好きだけど恥ずかしい、という微妙な距離感で読んでいました。

思えば短大生の頃の私は、自分が若い女性であることを素直に楽しめる余裕がなかったのだと思います。初めて同性ばかりの環境となり、新しい友人達が化粧やお洒落や恋愛に夢中になってゆくことに取り残されて焦るような、けれど同じようなことは恥ずかしくて出来ないという、とても頭でっかちな学生でした。「マシュマロ」への気恥ずかしさも、自分は女性らしく振舞えないとの思い込みから来たのでしょう。今の流行りでいうところの自分に自信のない「こじらせ女子」だったのかもしれませんが(この言葉もきちんとした定義がないのでこのように使って良いのか迷いますが)。そんな中で出会った短歌は、二十歳間近とはいえ幼すぎた私の自意識を解放する手段としてぴったりでした。短歌にあらわれる私は私であって私ではないという自由さと、自分の中のモヤモヤを言葉で表現することにすぐにのめりこみました。

「女性であること」への気恥ずかしさは、社会に出て仕事や私生活で性別や年代を問わず様々な人たちと関わることで少しずつ薄らぎ、結局のところ自分自身でしかないのだと思うようにもなりましたが、あれから二十年、今なお短歌を作りながら暮らしています。

くりかえす日々の水面にときどきは女の鶴が来て水をのむなり
後藤由紀恵

(平成六年度愛知淑徳短期大学国文科卒)

ジェンダー雑感～来し方を振り返って思うこと～

鈴木 朋子



我家は核家族、共働き夫婦として、2人の男児を育ててきた。イクメンのハシリのような夫に感謝しながらも、また、かなりハッピーに子育てを楽しんできた手応えを持ちながらも、家庭内役割における男女の不平等感に関するしこりはあった。その都度“なんで…”と、つぶやきながら過ごしてきた。でも、子育ては常に前向きに進んでいくもの。さらに脳天気な性格が幸いして、当時のギクシャク感も、今となっては、コーヒーを燻らせながら、思い出の一場面として回想することができる。私のジェンダー関連のリサーチクエスションも、何ら深められることもなく今に至っている。そして、この文章を書くにあたり、ジェンダーに対するセンシティブリティも、年齢や環境とともに変化することに気づいた。自分にとっての旬は、今を去ること10年ほど前であった。従って、いささか迫力と信頼性に欠ける文章になることをお許し願いたい。

我家の子供たちは、0歳児から保育園にお世話になってきた。先生も子供も一日をやりきった感の漂う保育園に、毎日駆け込むようにお迎えをしていた私。その後、子連れで買い物、夕食準備、夕食を食べさせて片づけて、入浴。一緒にテレビを見、遊び、おしゃべりし…言語聴覚士の私にはこの子供とのふれあいタイムも譲れない。とにかく疲れ切って読み聞かせの本を開くこともなく布団に入るや否や眠りに陥ることもしばしばだった。勉強会、会議、残業など、遅くなる度に、この役を夫に頼むことになったが、夫も実によくやってくれた気がする。遅く帰宅する私に、“ご飯？お風呂？（どっちが先？の意）と聞いてくれる夫を、私の友人たちはよく羨ましがっていたものだ。子供たちは、お父さんカレーやお父さん唐揚げを絶賛していた。でも、彼は、時折、ひどく不機嫌だった。渋々ならやってくれなくていい、というセリフを大人の打算で飲み込みながら考えた。そもそも、なぜ、私が頼む人、夫が頼まれる人なのか。また、いつも私が感謝する人、夫が感謝される人なのか。私は、たとえ疲れていても、山のような仕事を抱えていても、チャンネルを切り替えて子供と過ごす時間を楽しんでいたからそれでよしとしよう。でも不公平ではないか。こんなに頑張っているのに、私の頑張りは当たり前で、時々担当する夫は褒めるに値する。そう、明らかに、私が子供のことを全てすることが前提になっていたのだ。

0歳から保育園に通った我が家の子供たちにとって、保育園はパラダイスであり、家庭に近い場であった。そこは、子育てに関する喜怒哀楽を共有できる空間であり、いわゆる保育園のママ友は、子育て同志でもあった。従って、出張の時も、夫ばかりに頼むのではなく、友人にサポートを頼もうとした。しかし、な

ぜか、彼は、それを好まず、無理してでも自分でみようとした。他者への遠慮や責任感もあっただろうが、母がやりきれない面を自分がカバーするという役割意識に則っている気がした。そこには、子育ては母親がすべきという固定観念が見え隠れしていた。困ったときはお互い様という、コミュニティ意識によって、子育ては楽になり、子供の社会性にも良い影響を及ぼすものと私自身は考えていたが、夫にしてみれば、責任を放棄することでしかなく、私自身が友人と交流したいという下心あつてのことと思われていた。介護においても、男性介護者は、女性介護者と比較して、周囲とのつながりが弱く、孤立しやすいということ。ここにも男女差があるのだ。我が夫が決して特殊なわけではないらしい。子連れで、母親たちが集まり、おしゃべりし、思いを共有することが、ストレス発散、サポート的な内容となりうるのに、インフォーマルなお楽しみ会へのお父さんの参加は皆無に近い。たまに参加してくれるお父さんは、英雄的な存在感を持っていたのを記憶している。

あれから10年。イクメンという用語が市民権を得てきた昨今、状況は変わったのだろうか。お父さんたちも、パパ友たちと、子育てに必要な、サロンの空間を作って楽しんでいるのだろうか。最初から、夫と妻は、家事も子育ても割り勘的なルールを作って合理的にスマートにこなしているのだろうか。仕事と家事と育児とで疲労困憊した妻を、ねぎらって、今日は僕に任せて息抜きをして来いよと言ってくれる夫も増えているのだろうか。マスコミの報道や、自分の周辺を見る限り、変化は緩やかな気がする。少子高齢化のこの時代において、子どもを産み育てつつ、質の高い労働力を提供する。どちらも日本の将来のために必要なこと。相手を思いやりながら、お互いの違いを生かして、できるだけしこりなくこの時代を楽しんでほしいものと願う。その先には、介護する時代、さらには介護される時代が待ち受けている。そこで、私たちは、再度ジェンダー問題にぶつかることになるのだろうか。それとも、ジェンダーを卒業したヒトとしての境地に達するのだろうか。自分にとっては、未踏の地である。

(健康医療科学部 言語聴覚学専攻教授)



第8回

「ジェンダー視点の卒業論文・卒業制作」報告会 開催

2015年1月19日(月)長久手キャンパス1043教室

1月19日(月)に第8回「ジェンダー視点の卒業論文・卒業制作」報告会を開催致しました。

今年度は、文学部より1名が卒業論文について、メディアプロデュース学部より1名、ビジネス学部より1名が卒業制作について発表しました。以下は報告者の顔触れとタイトルです。



『テス』における「清純さ」について

〈文学部 英文学科〉 羽根田 瑛千

Voice of Hope Project

〈メディアプロデュース学部 メディアプロデュース学科〉 下村好輝



ジェンダーフリーマーケティング

〈ビジネス学部 ビジネス学科〉 中川亜利寿

報告会の後は恒例の茶話会です。



第5期 連続講座のお知らせ

恋愛で傷つけないために (仮題)

講師

可児康則さん
牟田和恵さん
高山直子さん

開催日程

6月 9日(火) 13:30-15:00
6月17日(水) 11:10-12:40
7月 1日(水) 11:10-12:40

場所

星が丘キャンパス
長久手キャンパス
星が丘キャンパス

詳細につきましては、後日愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所ホームページに掲載いたします。どうぞお気軽にご参加ください。

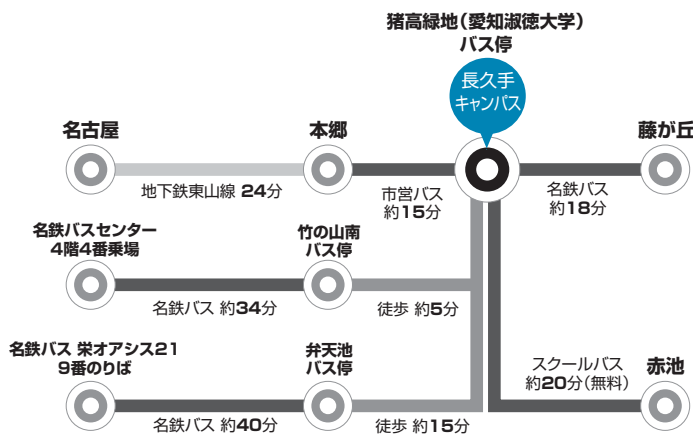
施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です！

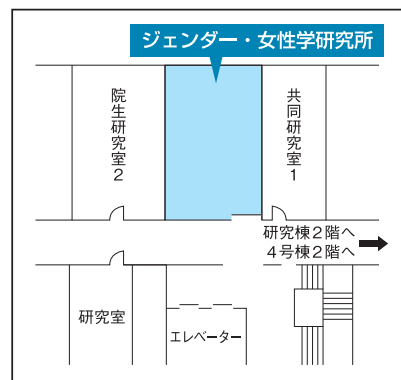
開室日 毎週月曜日～金曜日 **開室時間** 9:00～17:00

場 所 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階

案内図



長久手キャンパス8号棟 4階



編集後記

本研究所立ち上げから初期の運営に多大な貢献をされた國信潤子先生が昨年末にお亡くなりになりました。2015年度に20周年を迎える研究所の歴史をふりかえるためにも、そろそろ先生に一度お話を伺わねばと思っていた矢先に届いた悲しいお知らせでした。研究所には國信先生のご活躍を記録した音声や動画資料が残っています。先生の生前を偲ばれたい方はいつでもご利用ください。また、國信先生の思い出などがございましたらお寄せください。

(石河敦子)

ASU・IGWS2014年度

運営委員

酒井晶代(所長兼) 佐藤朝美 佐藤実芳
末田邦子 高橋啓介 平林美都子
福本明子 森井マスミ 米倉五郎
若松孝司

事務担当

石河敦子